

## 研究発表レジメ

英米文化・文学

### Dickens による *Every Man in His Humour* の上演

西條 隆雄（甲南大学元教授）

1845 年、Dickens は文人・出版仲間を誘って素人劇団を結成し、その初回の出し物に Ben Jonson の *Every Man in His Humour* を選んだ。慈善目的の興行は大成功を収め、5 年間にわずか 9 回（うち 3 回はリットン卿の居館における私的な上演）上演しただけであったにもかかわらず、ディケンズは 19 世紀において *Every Man in His Humour* を電撃的に復活した人として演劇史に名をとどめている。

1598 年が初演で、それもシェイクスピアが推挙しなければ消え去っていたかもしれないこの Jonson の新作は、さしたるプロットもなく、どちらかといえばいくつかのサブプロットが寄り集まった感じの作品で、愛の物語が生成されるとか何かの解決に向かって劇が進んでゆくこともなく、どこかまとまりにかけず。ディケンズがいくら天才的な役者でありかつ舞台監督・演出家であったとしても「電撃的な復活」をはたすのは難しかったにちがいない。しかも 19 世紀、Jonson 劇は「卑猥で」「術学じみ」「廢語に満ちている」の非難にさらされている。

Restoration 期には Thomas Killigrew (1663) や Gerard Langbaine (1691) が「時折上演されている」とか「ほぼ好評を得ている」とは述べているが、劇場を支えるほどの興行には至っていない。また、1725 年に John Rich が改作を施して上演したものの、誰一人評論する人はなく、以後 26 年間、上演はされていない。

その劇的な復活を成し遂げたのは David Garrick (1717-79) であった。彼が Drury Lane を任されたのは 1751 年、34 歳の時である。彼は記念すべきこの年に *Every Man in His Humour* の上演を企画したが、その彼にしても、1 世紀以上にわたって成功を見ない芝居を復活させるのは大きな冒険であった。3 年にわたって研究を重ね、不評の原因を取り除き、足りないところは加筆して 18 世紀観客の趣味と品性に合致するように改変を施して、1751 年 11 月 29 日にこれを上演したのである。これが大好評を博して、このエリザベス朝の喜劇は劇的な復活を遂げ、以来 1776 年まで、Drury Lane ではこれが恒例のレパートリーの一つとして上演され続けるのである。

Dickens が用いたのはもちろんこの Garrick 版。これをさがしだして、1616 年の Folio 版に基づく版本と比較し、加筆・削除の跡を照らしながら Garrick の Kitley（若き新妻を家に残しておくことに異常な妄想をめぐらし嫉妬にかられる商人）と Dickens の Bobadil（ほら吹き退役軍人）を追ってみたいとおもっている。

## 画家の復讐—Henry James の作品に伏在する芸術家のルサンチマン

中井 誠一（島根大学教授）

Henry James には、画家が主人公、あるいは主要人物として登場する作品が多数あり、それらはしばしば「芸術家もの」として分類される。また、1870年代には *The Atlantic Monthly* や *The New York Tribune* に数回の美術評を載せるなど、実際にも James の美術への関心は広く、造詣は深い。自伝には、1860年頃、当時画家志望だった兄 William が、ラファエロ前派の創設者のひとりである William Holman Hunt に師事していたこともあり、自身も兄に付き添って New Port の Hunt のアトリエを頻繁に訪れた様子が描かれている。このように、若い頃からの美術や画家との触れ合い、James 一家の芸術への指向性などが、後年の James の美術観を形成し、美術的モチーフを鏤めた数多の作品を生み出すことに大きく寄与したことは疑いない。

しかし、そうした経験から生み出された作品のテーマは一様ではなく、*The Tragic Muse* のように〈芸術と現実世界との相克〉を描く小説から、*The Madonna of the Future* のように〈不毛な芸術的情熱〉を例示する短編など、明確に思えるテーマの作品を拾い上げてみても、芸術を取り上げる James の筆が、単に芸術の礼賛に終わることではないのである。しかも、表面上、芸術の勝利を描いたように思える作品の中にも、その背後に、ある別のモチーフを胚胎しているものがある。そのモチーフとは「復讐」である。

この発表では、James の短編 “The Real Thing” (1892) と “The Story of a Masterpiece” (1868)、そして “The Liar” (1889) を取り上げ、それぞれの物語の中で、登場人物の画家が、表層の「語り」の下に伏在するルサンチマンを晴らすために、意識的にせよ、無意識的にせよ、密かな「復讐」を行っていることを、実際の美術史上の出来事を援用しながら検証してみたい。

### 英語学

## 日本語の壁塗り交替の容認性は何によって決まるか？ — 一目的語の組み合わせから生まれる語用論的な意味の影響 —

青木 奈律乃（甲南大学大学院 博士課程）

壁塗り交替とは、(1a) のように theme を直接目的語とする形式 (Theme-object type) と、(1b) のように location を直接目的語とする形式 (Location-object type)

の間で起こる交替である。

- (1) a. 壁にペンキを塗った (Theme-object type, 以下 T タイプ)  
b. 壁をペンキで塗った (Location-object type, 以下 L タイプ)

動詞が theme の移動、location の状態変化のどちらにも言及することができる場合、こういった壁塗り交替が可能だと指摘されている。(1) において、「塗る」は (i) ペンキ等がある場所へ移動すること、(ii) 場所がペンキ等の付着によって状態変化を受けるといふことの二点どちらにも焦点を当てることができ、交替を見せる (Okutsu 1981, Pinker 1989, Kishimoto 2001 etc.)。

しかし、次の (2) では、(1) と同様「塗る」が現れているにも関わらず、L タイプで容認性が落ちると指摘されている。

- (2) a. 太郎はパンにバターを塗った (T タイプ)  
b. \*太郎はパンをバターで塗った (L タイプ) (Okutsu 1981)

先行研究で指摘されているように、動詞の意味によって交替の可能性が決定するのであれば、(1b) (2b) の容認性の差は説明できない。さらに、名詞が交替の容認性に影響を与えることはすでに指摘されているが、詳細は明らかではない (Okutsu 1981, Kishimoto 2001, Kuroda 2004 etc.)。本発表では、名詞の意味が壁塗り交替の容認性に影響を与えるメカニズムについて考える。特に、目的語の組み合わせによって語用論的に生まれる様態、また theme と location の機能的な結びつきが T タイプ・L タイプの容認性と関わりがあることを、質問紙調査の結果にもとづいて主張する。

## Usted abrió la caja, ¿no?-付加疑問文を再考する-

根之木 朋貴(甲南大学 非常勤講師)

岡村ビクトル 勇(神戸市外国語大学 非常勤講師)

本発表では(1)-(2)のような付加疑問文(Tag Questions, 以下 TQ)の例を対象にしていかにして派生されるかに焦点を当てる。

### (1) Dependent tag questions

- a. Sharon could probably pull a muscle doing that, **couldn't she?**  
b. Mr. Nelson usually smokes opium before class, **isn't it?**

### (2) Invariant tag questions

- a. Sally can't come because she's busy cleaning her dungeon, **right?**  
b. Ron will be here soon with the crackers and spreadable meat, **yeah?**

(1)は dependent type(独立型)、(2)は invariant type(非変異型)の TQ に分類される。Sailar(2009)は(1a)を通常の動詞句削除との共通点をあげ、両派生構造を統一的に説明している。また Barros & van Craenenbroeck(2013)では会話の前後関係から動詞句部

分のみならず文全体を問う例をあげ分裂文構造で派生される可能性をも指摘している。

ただいずれの分析でも問題になるのは(1b)では動詞句ではなくなぜ TP 全体が削除されるか、またいつ適用されるのかについての説明がされていない。さらに(2)型の TQ は BNC、映画や歌詞など(1)よりも圧倒的に多く見られるにも関わらず例外とされ分析がされていない点もあげられる。これらの問題を解決するために本発表では TQ 全体を再整理し全型がどの体系で派生されるのか統一的に説明すべく代案を提示する。

(3) a. What did she start on, **was it nine or eight?**

b. What does he do to you, **that's so nice?**

Halliday & Hanson(1976)、住吉(2005)は(1)に似た分離疑問文(3a)を代用型、(3b)を付加詞型と呼称している。この分析を(1)(2)の TQ 構造に拡張し、Lopez-Cortina(2007)で論じられている(4)の ConjP 構造を土台に統一的説明を試みる。

(4) a. [IP she [vP pull a muscle ] [Conj either-or] [IP she [SC [ConfP pro [Conf' φ it]] not ]]]...

b. [ConjP either- [C couldn' t [+WH] [+confirm] [TP she [vP pull a muscle [ConfP...

最後に岡村(2013)によるスペイン語では語尾に *verdad*(真実)等をつけて上昇調で発音する(5)が圧倒的に多く逆に (1)は見受けられない等の指摘を検証し幅広い視点から TQ 全体の捉え方に関する議論を展開する。

(5) Usted abrió la caja, ¿no? (You opened the box, didn't you?)